社長就任インタビュー

楽しくなければ続かない！
厳しくなければ成長なし！

（株）ウォーターテック社長
花川　因（ちなみ）氏に聞く

（株）ウォーターテックは1963年（昭和38年）創業し、西原グループのエンジニアリング・メーカーとして着実な地歩を築いてきた。西原グループから離れてからも全国展開し、中堅メーカーとして日本の水処理業界になくてはならない存在となっている。その「ウオテク」の新たなトップに花川因氏が就任した。同氏は北海道大学理学部化学科を卒業した後、1984年、積水化学工業（株）に入社し、関連の山梨積水（株）社長など、多彩な実績を上げてきた人である。これまでの歩みと抱負を伺った。

（水道ネットワーク通信　有村源介）

薬学を志望し北大理Ⅱに

――ウォーターテックの社長に就任されたのを機に、これまでの足跡と所信をお聞かせ頂きたいと思います。まず、大学進学までのお話を。

花川　これまでの人生を振り返ると、良き人との出会いと、手前味噌ではありますが、何事も一生懸命やって来たということが大きな柱だと言えると思っています。

生まれは1961年（昭和36年）２月で、大阪府羽曳野市出身です。土地柄と言いますか、中学校ではいわゆる“悪ガキ”が多かったです。バレーボール部に入ったのですが、中２で退部しました。退部の理由は先輩の方々が怖かったというのが、正直なところでした。

花川　因氏

この頃、早稲田大学政経学部出身の人が開いた塾の先生と出会い、勉強の楽しみを教えて貰いました。それで学業がアップし、その結果、大阪府の第７学区トップの生野高校に進学できました。これは一つの転機でした。高校ではもう一度バレーボール部に入部し、背は低かったのですがセッターとして３年間、メンバーとともに一生懸命練習し、大阪府でベスト４まで行きました。ここではOBのコーチの存在が大きく、その方とは未だに年賀状を交わしています。

大学受験では共通一次試験が導入された第一期生でしたが、志望した大学の薬学部が不合格で、一浪して薬学がある北海道大学の理Ⅱに合格しました。他に大阪薬科、京都薬科、近大薬科にも合格しましたが、親父が「将来のことを考えると旧帝大に行った方が良い」と考え、親元を離れて遠く札幌に行きました。

――「薬学」を志望された理由があったのですね。

花川　子供心に、「薬を開発して儲けたろ」と思たんですかね（笑い）。当初、医者を目指そうと思ったんですが、医学部は私の能力では到底むりだと自覚してましたね。

――では、「社会貢献」と勝手に理解しました。北大での生活は？

花川　雪深い札幌で一人で暮らす中、周りの人に助けられ人との付き合いの大切さを知りました。つまり、頭を下げてお願いする事は、この時、自然に身に付いた気がします。

クラブは迷わずスキー部に入部し、スキーに明け暮れ一生懸命取り組んだ結果、准指導員のライセンスを得ました。一方で、学業の方は教養での点数が足りなかったため、薬学部への移行ができず、何となく理学部化学科を選びました。今思うと、工学部の方が自分には合っていたように思います。しかし、理学部を選んだことで、小樽出身の妻と出会えました。

――化学科での研究は？

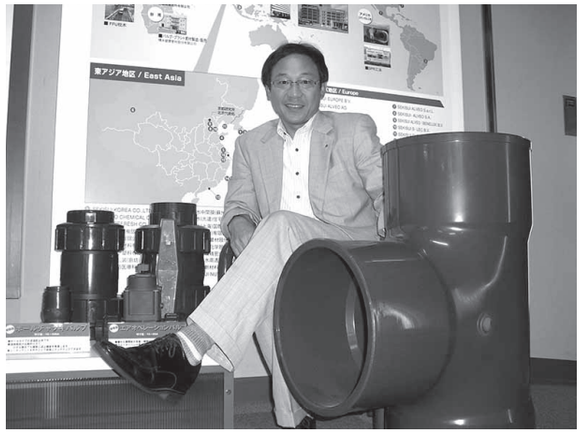
花川　田部先生という触媒の権威がおられ、先生の下で、「固体超強酸触媒」の研究をしていました。ナイタースキーでの練習を終えた後、夜の10時過ぎに研究室に戻り、よく実験をしていました。実験装置はガラス管で反応させる為、よくガラス管が割れて一晩中“ガラス細工”をしていたことが思い出されます。

メディカル部門がある積水へ

――積水化学工業へ就職する経緯は？

花川　親元へ帰りたいこともあり、関西の企業を希望しました。触媒の研究をしていたことから、関連企業を紹介して頂きましたが、まだ薬学の夢を捨てきれず、これから成長するメデイカル部門がある積水化学１社のみ志望で採用頂きました。

北海道大学理学部卒の学歴なら、まずは中央研究所へ配属されると思っていましたが、水道・電力・給湯向けの塩ビ管とプラスチックサッシを生産している京都工場技術課に配属となりました。



積水化学工業（株）プラントシステム事業部長時代の
パートナー事業説明会で（2010年6月、京都研究所か）

当時、工場では合化労連が強く、工場では残業は厳しく規制されており、研究所に配属された同期に劣等感を感じて、不貞腐れて社内スポーツクラブ活動に明け暮れていました。そんな時、当時の専務から、「メーカーは工場が一番大切なんだ」と説かれ、それ以後与えられた改善テーマに一生懸命取り組みました。同時に、各種スポーツクラブでの先輩方との人脈の輪が広がりました。

画期的だった耐火塩ビ管開発

――この頃のエピソードをお聞かせください。

花川　入社２年目の1985年８月12日、日航機墜落事故で父を亡くしました。私が24歳の時でした。この時も周りの人にお世話になり、父の偉大さと人間関係の深さと広さに驚きました。10月12日には京都工場長の仲人で仏前結婚を執り行いました。

――お父上はどのようなお仕事につかれていたのですか？

花川　親父は教員で、バレーボールの高体連の“エライさん”やったんですよ。

――それでバレーボールと縁があったのですね。そういうご苦労をされながら、滋賀・栗東工場の製造責任者、本社スタッフとして技術開発や事業運営に携わられ、関連会社の社長として経営

に当たられてきた訳ですが、特に印象深かったことや誇れる業績をご紹介ください。

花川　冒頭にも触れた通り、一生懸命取り組んできたつもりですが、転勤の度に帯同してくれた家族に支えられてきました。改善テーマへの取り組みは、１人では決して出来ないことであり、一緒に取り組んでくれた仲間や社外のメーカー担当の方々とは、未だにお付き合い頂いています。

その中でも、大きな成果というと、耐火塩ビ管の開発（耐火VP）でした。ビルには防火区画というものがあり、出火した時に炎や煙が伝わることを防ぐため、塩ビ管は使えなかったのです。そのため、炎や煙が伝わらない塩ビ管の開発に取り組みました。そこで着目したのが「蛇花火」で、着火すると蛇のようにクルクルと膨張して、管の貫通部から炎と煙が伝わらない塩ビ管を開発しました。しかし、その素材を単純に入れるとJIS規格に適合しなかったのです。そこで管を三層構造にすることにより、JIS規格の性能を満たした製品に仕上げることに成功したのです。これにより従来の塩ビ管と同様な施工ができることで大きな反響を呼びよく売れましたし、今も売れています。従来の製品より軽量で施工が楽になることから、施工業者を始め、関係者からは本当に喜んでもらえ、信頼関係を築くことが出来ました。施工業者の立場に立った開発で、大きな達成感と楽しさを感じる瞬間でした。

――今回、水道のエンジニアリング・メーカーのトップに就任するに当たって、水道事業に対してどのように見ておられますか？

花川　2005年（平成17年）に東京本社の給排水システム事業部技術開発室長を拝名し、この時から単身赴任がスタートしました。この時、日本水道鋼管協会小径部会技術委員長や塩ビ管継手協会技術委員長を務めることになり、ここで初めて水道に関わることになりました。それまで水道業界とのご縁はほとんどありませんでした。

新聞や雑誌での情報によると、給水人口の減少や節水機器の普及により水道料金収入が減少し、特に中小規模水道の財政が悪化していると聞いています。一方、施設の老朽化や耐震化対策が強く求められています。

耐火VP開発の記事（2007年）、
「フジサンケイビジネスアイ」紙
（日本工業新聞社）

そうした中で、水道事業を管轄する主務省が厚生労働省から国土交通省に移行することになり、大きな転機を迎えることになりました。水道事業が直面している諸課題を克服し、将来に向けて安心・安全な給水を持続させていくためには、広域化と官民連携が必要である、と言われていますが、それを柱にして、事業形態は確実に変化していると思います。

では、当社はどのような立ち位置にあるかというと、水道のエンジニアリング会社として、規模は小さく、当面は国内の水メジャー企業の役に立つパートナー的存在として活動していくことになるだろうと思います。それを進めつつ、経営の足腰を強くし、徐々に現在の規模を大きくしていき、年間の売り上げを現在の40億円から100億円規模にまで成長させれば、産業界の基幹メンバーとして、今以上に社会に貢献できるのではないかと思っています。

そのために、新卒の学生に入社して頂き、人間的豊かさと技術能力を育成する環境を強化すると同時に、小さい会社を育てて行く夢をもったキャリア採用を進めていきたいと思っています。信頼を得、誠実さの企業文化を創り上げたいと思っています。

山梨積水（株）製造現場の皆さんと退任記念撮影
（2021年9月、塩ビ継手第２工場前）

過去の歴史を知り未来へ

――お話を伺い、この間、水道に関する情報を集められて来られた印象です。

花川　ウォーターテックの社長就任を打診頂き、内定が決まってからの１カ月間、私なりに勉強させて頂いたつもりです。「温故知新」とはよく言われることではありますが、水道業界で事業展開するには、特に「過去の歴史を知って初めて、未来に向かって行ける」ことの大切さをひしひしと感じています。

年間売り上げ100億円規模で
産業界の基幹メンバーに

産官学の分野にわたる多くの方々との出会いを大切に、日本の水道事業が直面している課題の解決に貢献できる水インフラをいかに社会に導入していけるかを考え、行動し続けたいと思っています。熱意、即ち知恵と、豊かな心をもった人が集積している企業として、存在感を高めていきたいと思います。

企業として言われた事だけ請け負うのではなく、今後の水道の安定経営の持続を考え、提案していく姿勢が大切であり、選んでもらえる、声のかかる会社にしていきたい。そのPDCAが持続可能な水道経営の歴史を創り上げていくと思います。

――ありがとうございました。

花川　因氏のプロフィール

1961年（昭和36年）２月生まれ、大阪府羽曳野市生まれ、1980年 北海道大学理Ⅱ系入学、1984年 同大学理学部化学科卒業、同年４月 積水化学工業㈱入社、京都工場技術科配属、1989年 同滋賀栗東工場技術課、1994年 ケミカルズ研究所塩ビ技術センター（徳山積水内）、1997年 管材総合研究所 新製品開発グループ長、1998年 滋賀栗東工場 管材製造課長、2004年 滋賀栗東工場管材製造部長、2005年 東京本社 給排水システム事業部 技術・開発室長、2009年 東京本社プラント管材事業部長、2014年 山梨積水㈱代表取締役社長、2021年 積水化学北海道㈱専務取締役、2022年 積水化学工業㈱定年退職、2022年７月 ㈱古島 顧問、2023年７月 ㈱ウォーターテック代表取締役社長

資格：危険物取扱者甲種、高圧ガス製造保安責任者甲種化学、２級管工事施工管理技士、２級土木施工管理技士